

江戸前期経穴学における骨度について

鶴田 泰平

日本鍼灸研究会

「骨度（法）」は、個人の体格の大小に影響されない、人体各部の距離（長さ）に関する、その人体部位専用の定数（化システム）であり、同じく人体の特定部位の距離を定数化し、他の部位にも適用可能とする「同身寸（法）」とともに、鍼灸臨床や経穴学における経穴の位置決定のうえで重要な役割を担う。

骨度の初出は『靈枢』（B.C100）の骨度篇に見られ、「衆人之度」「衆人骨之度」として「人長七尺五寸」から「上七節至于膂骨，九寸八分七厘」まで、全身に関する凡そ40箇所の骨度が言及されており、『鍼灸甲乙経』（3世紀）、『黄帝内経太素』（7世紀）、『聖濟総録』（1117）、『十四経發揮』（1341）、『神応経』（1425）、『古今医統大全』（1556）、『類経』（1624）、『類経図翼』（1624）などの後発の中国医書には、図や注釈を付加し、人体部位別に分類して解説されるなど、様々な形で引き継がれている。その概略として、『鍼灸甲乙経』では「骨度腸度腸胃所受第七」に『靈枢』骨度篇を引用、『黄帝内経太素』では「身度・骨度」に『靈枢』骨度篇を引用、『聖濟総録』では「骨度統論」に続き、「骨空穴法」にて『靈枢』骨度篇を引用、『十四経發揮』では骨度や尺寸、同身寸などを言及する文章部分はなく、「伏人尺寸之図」「仰人尺寸之図」の二図にて骨度を示し、『神応経』では『靈枢』骨度篇を踏襲した記述法ではなく、「折量法」と題して、頭部、背部、腹部（胸部の寸法を含む）、手足部の部位別に人体分寸、同身寸法を記述し、『古今医統大全』では頭部、胸部、腹部（手足の寸法含む）の部位別に人体分寸を記し、『類経』では『靈枢』骨度篇を引用し、『類経図翼』では「仰人骨度部位図」「伏人骨度部位図」（共に骨度の部位のみで寸法の記入なし）を示したのち、頭部、胸腹部、背部、側部、手足部の部位別に人体分寸を記している。

この度は、江戸前期（1603～1680）の経穴学における骨度の役割りや位置づけについて考察することを目的に、①『古今集鍼法』（1613）長生庵了味著、②『日用之灸法』（1633）曲直瀬玄朔著、③『啓迪庵日用灸法』（未詳）未詳、④『日用灸法并鍼法』（未詳）未詳、⑤『鍼灸合類』（1660）雄洋散人著、⑥『十四経發揮鈔』（1661）谷村玄仙著、⑦『経脈發揮』（1668）饗庭東庵著、⑧『経脈葉註』（1669）名古屋玄医著、⑨『主治針法』（1677）著者未詳、⑩『必要灸穴秘穴』（1678）名古屋玄医撰、⑪『鍼灸枢要』（1679）山本玄通著、⑫『十四経發揮俗解』（1680）、⑬『鍼灸抜粹』（1680）の鍼灸書、経穴書について、その骨度と同身寸（いくつかの書物で骨度と同身寸が混同されている為、同身寸についても調査した）に関する記述の内容と典拠を調査した。

調査結果の概略として、上記①～⑬のうち骨度のみ記載は⑥⑦⑧⑫の4書、骨度と同身寸の併記は⑤⑪⑬の3書、同身寸のみ記載は①②③④⑨⑩の6書である。また、骨度に関して特に詳細な解説と考察がなされているものは⑥と⑪で、⑥は『十四経發揮』の「仰人尺寸之図」「伏人尺寸之図」に記載される骨度について、「経曰（『靈枢』骨度篇）」「註證曰（『靈枢註證發微』）」「類曰（『類経』）」「図翼曰（『類経図翼』）」「愚謂（玄仙按語）」にて詳解し、更に「仰人七尺五寸合数」「伏人七尺五寸合数」として人体前面と後面の分寸の内容を記し、『靈枢註證發微』所収の「仰人骨度図」「側人骨度図」「伏人骨度図」を採録する。⑪は卷一の「骨度」にて頭部、胸腹部、背部、側部、四肢部の部位別に骨度を記載し、『類経』を中心に、『類経図翼』『靈枢』（「経曰」）などを引用し、「愚按」を付して詳解し、更に卷二の「図類」にて『類経図翼』卷三所収の骨度部位名のみで寸尺の無い「仰人骨度部位図」「伏人骨度部位図」と同じ図を採録する。